

平成二十七年 度 学 力 検 査 問 題

国

語

(九時二十五分～十時十五分)
(五十分間)

番

第

受検番号

注 意

1 解答用紙について

- (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
- (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄二か所に受検番号を書きなさい。
- (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
- (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
- (5) 解答用紙の※印は集計のためのもので、解答には関係ありません。

2 問題用紙について

- (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
 - (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十二ページです。
- 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

栗原歩は、全国大会の常連である岩北高校将棋部に初心者として入部した。歩は、将棋好きの祖父の指導や部員たちとの交流を通して次第に腕を磨き、三月の春合宿ではB級に入ることができた。県大会を前に、顧問の本郷先生の「歩……A級いいかもな。」という発言を聞き、歩は県大会でB級に出場するか、さらに上のA級に出場するか迷っていた。

A級に出ようか、それとも、B級に出ようか。帰り道、歩はずっと考えていた。迷うことがなんだからうれしくて、鉛を噛まずに最後まで管め尽くす小さな子供のような真摯さで、ああでもないこうでもないと考え続けた。玄関のドアを開ける頃には、A級に挑戦するという方に気持ちは大きく傾いていた。

「ただいま。」

玄関を上がり、廊下を進むと、台所で母と話す妹の声が聞こえてきた。

「ねえ、塾の全国模試で十八位ってすごいでしょ?」

台所をのぞき込み、少しためらって、ただいまと声をかけようとした途端、母がぱっと歩の方を見て、小さな声を上げた。

「嫌だ、びっくりした。何そこでお化けみたいにはーとつとつ立ってんの。」

「……ただいま。」

口から出た途端、消えてしまうような小さな声で言って、台所を離れる。

「ねえ、ちよつと、歩。今日、晩ご飯、何食べたい? お母さん、パートで遅くなつて今からご飯作るんだけど。」

「……じゃあ……カレー。」

「お兄ちゃん、普通に考えて、今から煮込むの大変でしょ。」

妹がたしなめるような口調で言う。「ごめん。」と歩は反射的に謝った。

「お刺身なんかでいいよ、お母さん。」

妹の提案に、母がエプロンを外しながら、財布をつかむ。今日はお刺身かと思いながら、その場を離れる。夕食のリクエストもうまくできない自分がおかしくてうつつすらと笑う。

階段を上りながら、全国で十八位かと思う。すごい成績だ。A級に出るかもしれないということぐらいで、はしゃいでいた自分が途端に情けなく思えて、口元の嘘の笑顔もゆつくりと消えた。

夕食のメニューはやはりお刺身だった。歩への気遣いなのかももう一品用意されたサバのフライはカレー味だった。

「で、今日は部活どうだったんだ?」

母が席を立った隙に、祖父が尋ねた。歩が「別に。」と答えても、彼は根気強く質問を投げかけ、結局、歩はA級に出るかもしれないという話を口にしていった。

「へえー、ついにA級にねえ。そりゃ、大出世だ。立派なものだ。先生は歩の才能が分かってらっしゃるんだよ。」

祖父はいつも以上に歩を褒めちぎる。歩は居心地の悪さに思わず身じろぎした。

「でも……A級に出るかもって可能性の段階なんだから。」

父が口をはさむ。

「そうだけど……どのクラスに出るか決まりはないから、自分が出ようと思えば出られるよ。」

「でも、だからこそ自分の実力に見合ってるかっていうのが大事なんだろう。」

父が鼻を鳴らす。

「無理して実力以上のところに出たって意味はないだろ。そこで成績を残せないと。」

「だから、お前は どうして そうやって 頭から 決めつけるんだ。歩の力をよく知る先生が認めてくれているんだぞ。」

険しい口調の祖父に、父は、淡々とした口調で応じる。

「お父さん落ち着いてくださいよ。先生は歩にA級の力があるって言ったんじゃないんですよ。A級に出ることを止めなかつただけです。それを拡大解釈して、舞い上がって、恥をかくのは歩なんですよ。」

自分は先生の言ったことを拡大解釈して、舞い上がっていただけなのか。そして、恥をかくことになるのか。あまりにも乱暴な決めつけように、さすがにそれとおりだとは思えなかつた。しかし、父の言葉が何の傷も与えなかつたわけでもない。父の中の自分の評価が高いとは思っていなかつたけれど、ここまで低いのかと思うとすつと体が冷たく硬くなった。

「何の話？」

母が戻ってくる。父が説明すると、母は「あら、いいじゃない。」と明るい声で言った。

「強いライバルがたくさんいる方が、きっと歩も頑張れるだろうし。」

「歩はそういうタイプじゃないだろう……人一倍ゆつくり確実にやった方がいい。九九だつて、自転車だつて、早くやらなきゃいけないとプレッシャーを感じるたびに、いつも失敗してきたろうが。」

「僕……A級に出るよ。」

思ったよりしつかりした声が出た。食卓が一瞬しんとする。歩はもう一度、自分自身にも宣言するように繰り返した。

「僕、A級に出るよ。」

「よく言った！」

祖父が喜色満面で手を叩く。父は無言で新聞を広げた。

「……まあ、お前の人生だからな。お前がいいならいいんじゃないのか。」

だいたいお聞置いて、まったくいいとは思っていない口調で父が言う。それでも父が一応は肯定的な言葉を口にしたことに、歩は小さな勝利を感じた。

しかし、^③そんな小さな勝利も長くはもたなかつた。部屋に戻つてすぐ、ゆつくりと後悔のような気持ちが押し寄せてきてベッドに突っ伏す。

A級に出ると決めたことよりも、A級に出るということをもまるで武器であるかのように振りかざしたことに後悔があつた。もつと大事に、一人できちんと考えて、きちんと決めたかつたのに。

ノックの音がする。のろのろと体を起こしてドアを開けると祖父が立っていた。

「将棋やらないか。A級に挑戦するんだし、一局でも多くやった方がいいだろう。」

「……今日はいいよ。そんな気にならないから。」

「なんでだ。お父さんをギャフンと言わせてやりたいと思わないのか。」

「……そういう風な気持ちではやりたくないよ。」

「そういう心根の正しさはお前のいいところだが、ナニクソと思う気持ちも時には力になるんだぞ。あいつは どうもお前の力を過小評価してる。[※]歩だと侮つてるんだ。私はそれが悔しくてならない。お前は悔しくないか？ 自分は金だと証明したくないか？」

祖父の手が、両肩にかかる。その体温と重さが妙に生々しく、絡みつくようで、歩は咄嗟に振り払った。祖父は振り払われた腕をだらんと垂らして、ただただびっくりしている。

「……そういうのも、ちょっと苦しいんだ。」

自分でも心が冷えるほど冷たい声が出た。

「勝手に否定されるのも嫌だけど、勝手に期待されるのもしんどいよ。おじいちゃんは僕の味方になっていつも励ましてくれるけど、時々、僕じゃなくて、おじいちゃんの中の理想の僕に話してるんじゃないかって思う時がある。歩から金かぶになれって言われるたびに、今の自分はダメだって言われてる気になる。」

まるで体に害のあるものを飲み込んだ時の吐しゃ物のように、言葉が口からとめどなく流れ出す。

「そんな風に……感じていたのか……それは……悪かった。……どうも、混乱していて、うまく言葉が見つからない。また、明日にでもゆっくり話そう。」

しゃがれた、力のない声だった。

「ひとつだけ、これを言うのもお前には負担になってしまうのかもしれないが……今のお前がダメなんて、そんなことは絶対にない。」

ドアがゆっくりと閉まる。歩はそのドアにもたれるようにしてしゃがみ込む。

次の日、どんな顔をして家族と顔を合わせればいいのか分からなかったので、朝練の約束があると嘘をついて、食事をとらずに家を出た。母と会話している間、祖父の視線を感じたけれど、気づかないふりをした。

学校にいる間もずっと昨日のことが気にかかっていた。おじいちゃんは明日話そうと言っていた。家に帰れば、おじいちゃんと向き合っ、話すのかと思うと何とも気が重かった。

家に帰る時間を引き延ばそうと、いつも以上に対局を重ねる。しかし、勝負に集中できるはずもなく、結局、歩は一勝もできなかった。本郷先生に促され、しぶしぶ帰り支度を始める。その時、マナーモードにしていた携帯電話を見た歩は画面を埋め尽くす母からの着信履歴を見て、思わず凍りついた。数分間隔で表示されている着信履歴はただ事ではない。慌てて、折り返すが、電波の届かないところにいるというアナウンスが流れるだけだった。

思いついて、家に電話をかける。しかし、コールが鳴るだけで、誰も出ない。少なくともおじいちゃんがいるはずなのに、いくら待っても応答はない。嫌な予感しかしなかった。妹に電話をかけようと番号を表示させた途端、母からの電話が鳴った。

母は「そんなに大したことはないのだけど」とか心配ないということなのだけど」と言った前置きをくどいほどつけた上で、祖父が病院に運ばれたことを告げた。

家の中のちょっとした段差に躓つまずき、転んだ拍子に腰の骨を折ったのだという。母がパートから帰った時、祖父は廊下で倒れていた。痛みからか気を失い、廊下の寒さで体は冷え切っていたという。母が最初に言ったように命に別状はないものの、手術をし、ボルトで骨を固定しなければならぬ。しばらくは入院が必要とのことだった。

母は大丈夫だと言うけれど、祖父の顔を見るまで安心できなかった。痛いぐらいに鳴る心臓を手で押さえる^⑤。おじいちゃんが転んだのは絶対自分のせいだと思った。

歩は母が自分を安心させるために嘘をついているのではないかと何度も疑ったが、実際、祖父の怪我は決して致命的なものではなかった。祖父が年齢の割にしつかりとした体をしていただけもあり、絶対にまた歩くことはできると医者は太鼓判を押した。

実際、祖父も意外と元気そうで、歩が病院に駆けつけた際には、「びつくりさせて悪かったな。」と笑いながら歩を氣遣うほどだった。

(小山田桐子著『将棋ボーイズ』による。一部省略がある。)

(注) ※歩……将棋の駒の一つ。前に一つずつしか進めないが、敵陣に入ると「と金」となり、金と同じ動き(前後・左右・斜め前へ一つずつ進める)をする。ここでは、登場人物である歩の名前の由来となっている。

問1 ① 歩は居心地の悪さに思わず身じろぎした。とありますが、これは歩のどのような様子を表していますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

(4点)

- ア 何事も自分できちんと決められず、優柔不断な自分に引け目を感じている様子。
- イ 根気強く部活の質問を投げかけてくる祖父に対して、いらだちを隠せない様子。
- ウ まだ決めていないのに、A級に出ると祖父が早合点したので慌てている様子。
- エ 祖父が大げさに自分を褒めるのでいたたまれず、じっとしてられない様子。

問2 ② 父の中の自分の評価とありますが、父は歩のことをどのように考えていますか。その説明として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 自分の実力に見合った場所で成績を残すことが、歩には大事であると考えている。
- イ 他人の言葉を都合よく解釈し実力以上のことをしても、歩が恥をかかなくてと考えている。
- ウ ときには強いライバルたちに囲まれて頑張ることも、歩の成長には必要だと考えている。
- エ 早く結果を出そうとすると、歩はそれがプレッシャーになって失敗すると考えている。

問3 ③ そんな小さな勝利も長くはもたなかった。とありますが、このときの歩の心情の変化を次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、四十字以上、五十字以内で書きなさい。

(6点)

A級に出ることについて、父が一応は肯定的な言葉を口にしたことで勝った気持ちになっていたのが、

_____ 40 _____ 50 _____。

問4 ④ 自分は金だと証明したくないか？ とありますが、この言葉を歩はどのように感じているかを次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、二十字以上、三十字以内で書きなさい。

(6点)

祖父は、歩には将棋の実力が十分にあると励ましているのだが、歩は、	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 15px; margin-bottom: 5px;"></div>
<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div>	20
<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; margin-bottom: 5px;"></div>	30

と感^じて^いる。

問5 ⑤ おじいちゃんが転んだのは絶対自分のせいだと思った。 とありますが、このときの歩の心情を説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 昨日のことを謝ろうと決めていたが、祖父の視線を感じて言い出せず、祖父と和解できなかったことが、転倒の原因になったと考えている。

イ 昨日のことを気にしながらも、祖父と向き合うことを避け、祖父を落胆させたままにしたことが、転倒の原因になったと考えている。

ウ 明日話そうと約束をしていたにもかかわらず、それを忘れて対局に熱中してしまい、祖父を失望させたことが、転倒の原因になったと考えている。

エ パートで不在がちな母からの着信に気づかず、祖父を家に一人きりにしてしまったことが、転倒の原因になったと考えている。

2 次の各問いに答えなさい。(22点)

問1 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 稚拙な字を書く。
- (2) 峡谷を風が吹きぬける。
- (3) 運命に身を委ねる。
- (4) 電車がケイテキを鳴らす。
- (5) 夕日が空を赤くソめる。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

歴史的文化的に音楽を聴くというのは、実はそんなに難しい話ではない。詳しい知識はなくても、音楽を聴くとき私たちは常に、何らかの歴史／文化文脈の中で聴いている。逆に言えば、背景についてまったく知らない音楽は、よく分からないことの方が多い。例えば多くの人にとってポピュラー音楽が「分かりやすい」のは、その文脈が人々にとって身近なものだからだろうし、逆にクラシック音楽や雅楽が「難しい」のは、歴史や文化の背景がかなり遠いところにあるからだろう。①私

たちは美術館で絵を前にして、反射的に作者の名前を見ようとする。人によっては必ずまず作者の名を確認してから作品を見る。ダナ・アーノルドが言うように、美術館に入るや否や私たちは、美術と同様、歴史も探そうとする。またコンサートで作曲家の名前も作品タイトルも確認しないなどという人は、まずいだろう。そしてラジオで気になる音楽が流れていたなら、最後のアナウンスまで聴いて、誰がそれを歌っていたか知ろうとするはずだ。

アドルノはシェーンベルクの無調音楽を、いつの日かひよつとしたら誰かがそれを読んでくれるかもしれないという希望とともに、ガラス瓶に入れて大海原に流されたメッセージに喩えた。無調作品だけではない。おそらく私たちにとって多くの音楽は「未知の世界からのメッセージ」であり、それを聴くことは「ガラス瓶の中の手紙を開封すること」なのだ。「どこから来たのだろうか？／誰が書いたのだろうか？」——「歴史的文化的な文脈の中で音楽を聴く」とは、この問いの延長線上にある行為にほかならない。

実際のところ音楽は、それが生まれた歴史／文化の文脈から決して完全に切り離すことは出来ない。このあたりの事情を小沼純一は、次のように説明している。

「ひとつの音楽が生まれ、何年も何年もかかって育つてゆく、その土地、その場所、その環境、というのがあるわけです。そこから切り離してしまつたら多くのもの、大きなものが失われてしまう。それは、音楽が生まれ育つ共同体、共同体をつくっている成員、気候や風土、その他文化的なアクターが何重にもなっている。楽器だつて、その土地でとれた植物や動物、あるいは石、土などを用いるし、乾燥させ方なども気温や湿度などと関わってきます。日本の尺八や琵琶をアメリカやヨーロッパに持つていったときの苦勞、あるいはヴァイオリンやピアノを日本や東南アジアでメンテナンスすることの大変さは、しばしば耳にはいつてくることでもあります。」

音楽とは特定の文化の中で時間をかけて形成されてきたもの、そこでしか生まれえないものであり、つまり常に「どこから来た音楽」なのだ。

もちろん「場」を完全な形で保存することは不可能だし、そんなことを試みるのは無意味でもある。時代が変われば、そして別の文化へ輸送されれば、歴史／文化の文脈は否応なしに変化する。にもかかわらず、たとえ本来の文脈から切断されて別の時空に移動されたとしても、またしても音楽はそこで新たな別の文化文脈にはめ込まれる。例えば「土を向いて歩こう」がアメリカでは「スキヤキ・ソング」として受容されるとか、マーラーを聴くことが東京の若者の間で流行したとかいった例は、ある音楽が異郷において別文脈にはまって開花した例だ。いずれにせよ私たちは、音楽だけを真空状態で聴くことは出来ない。パソコンで転送される音楽だつて、それこそインターネット空間という一つの「場」の中にあると言えるだろう。②音楽は必ず文脈の中で鳴り響き、私たちは文脈の中でそれを聴く。歴史／文化とは音楽作品を包み込み、その中で音楽が振動するところの、空気のようなものなのである。

確かに現代の音楽状況をひどく複雑なものにしている、特殊な事情というものもある。それは今日、ある音楽(音楽作品／演奏／ジャンル等々)が時空横断的に、複数の文化文脈に属しているとい

う事実である。例えば、[※]ポリーニのショパン演奏にしても、楽譜の背後の意味を重視する人もいれば、意味を切り捨てた演奏に熱狂する人もいるし、コンピューター・グラフィックのようにショパンが弾かれるのを聴きたいと思う人もいよう。それぞれが時代上の異なつた地点で[※]涵養された、異なる名作／名演の記憶を持ち、違った作法や制度や技法を信奉する、目に見えない共同体を形成している。こんなことはおそらく、もつと音楽文化の共同体が小さく、同じ音楽を後の時代に演奏するなどということもなく、聴衆の趣味／様式感も統一されていざらう前近代には、ありえなかつた事態だらう。

であればこそ、^③今の時代にあつて何より大切なのは、自分が一体どの歴史／文化の文脈に接続しながら聴いているのかをはつきり自覚すること、そして絶えずそれとは別の文脈で聴く可能性を意識してみることだと、私は考えている。言い換えるなら、「無自覚なままに自分だけの文脈の中で聴かない」ということになるだらう。自分が快適ならば、面白ければそれでいいという聴き方は、やはりつまらない。こうしたことをしている限り、極めて限定された音楽（＝自分とたまたま波長が合った音楽）しか楽しむことは出来ない。時空を超えたコミュニケーションとしての音楽の楽しみがなくなってしまう。むしろ音楽を、「最初はそれが分からなくて当然」という前提から聴き始めてみる。それは未知の世界からのメッセージだ。すぐには分からなくて当然ではないか。快適な気分にしてもらうことではなく、「これは何を言いたいんだろう？」と聞くことの中に意味を見いだす、そういう聴き方を考えてみる。「音楽を聴く」とは、初めのうち分からなかつたものが、徐々に身近になってくるところに妙味があると、考えてみるのだ。こうしてみても初めのうちは退屈かもしれない。音楽など自分と波長の合うものだけをピックアップして、それだけを聴いていればいい——それも一つの考え方だらう。だが「徐々に分かつてくる」という楽しみを知れば、自分と波長が合うものだけを聴いていることに、そのうち物足りなくなつてくるはずである。これはつまり自分がそれまで知らなかつた音楽文化を知り、それに参入するというにはほかならない。

確かに忍耐の要る作業ではあろう。「異文化に参入する」とは「文化の作法を知る」ということである。たいして根拠もない煩雑な拘束ばかりあるように感じられて、最初のうちは煩わしくて仕方ないかもしれない。例えば日本の家屋に土足で入つてはならないし、和食をフォークで食べてはならず、刺身にソースをかけてもいけない。同様のことが音楽においても絶えず起きるはずである。これらすべて恣意的な約束事（場合によっては部外者を排除するただの意地悪）に思えて、なぜそんなものに従わなければならないのか、バカにされたような気になることもある。「どちらでも別にいいじゃないか」——それはそうだ。だが初めは理解出来ずとも、まずはそれに従つてみることによつて、徐々にさまざまな陰影が見えてくることもある。それらの背後には何らかの歴史的経緯や人々の大切な記憶がある。このことへのリスペクトを忘れたくはない。「[※]こういうものを育てた文化＝人々とは一体どのようなものなのだろう？」と謙虚に問う聴き方があつてもいい。^④歴史と文化の遠近法の中で音楽を聴くとは、未知なる他者を知ろうとする営みである。

（岡田暁生著『音楽の聴き方』による。一部省略がある。）

（注） ※ファクター……要素。

※ポリーニ……イタリアのピアノ奏者。ショパンの曲をリズムを変えて演奏した。

※涵養……徐々に養い育てること。

※リスペクト……敬意。

問 1 ① 私たちは美術館で絵を前にして、反射的に作者の名前を見ようとする。とありますが、「私たち」がこうした行動をとる理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 作者の名前によって、美術館の歴史を探そうと思うから。
- イ 作者の知名度が、その絵の文化的な価値を決めると思うから。
- ウ 作者を知ることによって、その絵の歴史的な背景を知ろうと思うから。
- エ 作者を確認することで、その絵の難しさを判断しようと思うから。

問 2 ② 音楽は必ず文脈の中で鳴り響き、私たちは文脈の中でそれを聴く。とありますが、これは、筆者が音楽をどのようなものと考えているからですか。次の書き出しに続けて、四十五字以上、五十五字以内で説明しなさい。(6点)

筆者は、音楽を

45 55

ものと考えているから。

問 3 ③ 今の時代にあつて何より大切なのは、自分が一体どの歴史／文化の文脈に接続しながら聴いているのかをはつきり自覚すること、そして絶えずそれとは別の文脈で聴く可能性を意識して、みることだと、私は考えている。とありますが、筆者がこのように考えたのは、どのような現代の音楽の事情があるからですか。それを説明した一文として最も適切なものを本文中から探し、そのはじめの五字を書き抜きなさい。(4点)

問 4 ④ 歴史と文化の遠近法の中で音楽を聴くとは、未知なる他者を知ろうとする営みである。とありますが、次はこの内容を説明したものです。空欄にあてはまる内容を、四十字以上、五十字以内で書きなさい。(6点)

異なる文化や歴史に参入し、音楽を聴くことは、

40

50 につながる営みである。

問5 本文の構成や表現の仕方について述べたものとして適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。(5点)

- ア 音楽と美術、東洋と西洋というように、複数のものを対比させながら論を進めることで、それぞれの特徴を読み手にはつきりと印象づけている。
- イ 「ダナ・アーノルドが言うように」「小沼純一は、次のように説明している」のように、他者の考えや説明を加え、筆者の考えを補っている。
- ウ 「ガラス瓶の中の手紙を開封すること」「空気のようなもの」などの比喩を用いながら、文章の内容を具体的に想像しやすくしている。
- エ 「もちろん」「確かに」などの語句を用いながら反対の考え方や異なる考え方を示した後、自らの論を展開することで、筆者の主張を説得力のあるものになっている。

4 次の文章は、東北地方の衣川で起きた戦いの話です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)(12点)

※伊予の守源頼義朝臣、貞任・宗任等を攻むる間、陸奥に十二年の春秋をおくりけり。

※鎮守府をたちて秋田の城にうつりけるに、雪はだれに降りて、軍のをのこどもの鎧
はらはらと 武士たち

みな白妙^①になりけり。衣川の館、岸高く川ありければ、楯をいただきて甲にかさね、
高くかがげて

筏をくみて責め戦ふに、貞任等たへずして、つひに城の後よりのがれおちけるを、

一男八幡太郎義家、衣川に追ひたて攻めふせて、「きたなくも、うしろをば見するものかな。
ひきまうにも 敵に背を見せて逃げる気が

②しほし引きかへせ。物いはん。」といはれたりければ、貞任、見帰りにけり。
後ろを振り返つたので

衣のたてはほころびにけり

といへりけり。貞任くつばみをやすらへ、鍛をふりむけて、
馬のくつわをゆるめ 首を振り向けて

年をへし糸のみだれのくるしさに

と付けたりけり。その時義家、はげたる箭をさしはづして帰りにけり。
弓につがえていた矢を納めて

さばかりのたたかひの中に、^③やさしかりける事かな。
これほど激しい

(『古今著聞集』による。)

- (注) ※伊予の守源頼義……現在の愛媛県にあたる伊予の国の長官であった源頼義のこと。
 ※貞任・宗任……陸奥(現在の青森、岩手、宮城、福島)の四県にあたる)の豪族である
 安倍貞任と安倍宗任の兄弟。
 ※鎮守府……陸奥に置かれた役所。
 ※八幡太郎義家……源義家。頼義の長男。

問1 たべずして とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。(3点)

問2 ①白妙しらたけになりけり。 とありますが、これはどのような様子を表していますか。それを説明した次の空欄にあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。(3点)

武士たちの鎧よろいが 様子。

問3 ②しばし引きかへせ。物いはん。 とありますが、次は、このあとの義家と貞任が交わし合った句について説明したものです。空欄Ⅰ、Ⅱにあてはまる言葉を本文中から探し、それぞれ三字以上、五字以内で書き抜きなさい。(3点)

家 義	衣の縦糸がほころびてしまうように、とうとう <input type="text"/> Ⅰ も攻め落とされてしまったな、と呼びかけた。
任 貞	歳月を経た古糸がばらばらに乱れるように、 <input type="text"/> Ⅱ も続いた戦いで味方の軍も乱れて持ちこたえられなかった、と返事をした。

問4 ③やさしかりける事かな。 は「風雅な振る舞いであつたことだ」という意味ですが、これは、貞任と義家のどのような振る舞いに対して述べたものですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 激しい戦いの中にあつても、句を交わし合うことで互いの気持ちを伝え合った、貞任と義家の振る舞い。
 イ 敗走する味方を逃がすために一人立ち止まった貞任と、それを見て追撃を止めて引き返した義家の振る舞い。
 ウ 敗北を認め最後の戦いを挑もうとする貞任と、勇敢な好敵手の命を惜しんで武装を解き引き返した義家の振る舞い。
 エ 激戦のさなか、敵、味方の立場の違いをこえて互いの武勇をたたえ、再戦を誓う句を交わし合った、貞任と義家の振る舞い。

5 国語の授業で、「百年後の日本に残したいもの」について話し合いを行い、次の①～③の三つの意見が出ました。この意見をもとに、「百年後の日本に残したいもの」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることになりました。

次の①～③の中から、あなたが「百年後の日本に残したいもの」を一つ選びなさい。また、それを選んだ理由を含めて、あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。(16点)

- | | |
|---|------------|
| ① | 美しい自然の風景 |
| ② | 歴史ある町並みや建築 |
| ③ | 伝統的な祭りや芸能 |

(注意)

- (1) 最初の段落で、あなたが選んだ意見を書くこと。
- (2) 段落や構成に注意して、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえて書くこと。
- (3) 文章は、十三行以上、十五行以内で書くこと。
- (4) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (5) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(以上で問題は終わりです。)